



Title	＜書評＞桐浴邦夫著『茶の湯空間の近代 世界を見据えた和風建築』
Author(s)	谷本, 尚子
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 118-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71214
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評 桐浴邦夫著『茶の湯空間の近代 世界を見据えた和風建築』

思文閣出版 2018 256頁

谷本尚子 京都精華大学

明治から昭和初期にかけての美術工芸についての研究は、デザインを研究テーマとする本学会の一角を占めている。また今日、近代以降の茶道文化に関する新たな知見を求める研究も様々な分野で注目され始めているように思われる¹。ここで取り上げる『茶の湯空間の近代』は、明治以降の茶の湯の空間についての研究書である。本書の特徴は、建築にとらわれず、近代茶の湯に関する現象を総体的に考察している点にあると思われる。以下、本書の興味深い点について述べる。因みに本書に関して筆者自身が概要を記したブログがあるので、参照して頂きたい²。

1. 茶の湯の近代化と博覧会

本書の第一章及び第二章では茶の湯文化が西洋人達によって注目されることで、また日本の都市計画の近代化の中で、変容していく過程を概観している。

その始まりは1867年のパリ万博であり、江戸幕府によって六畳座敷と土間のある檜造りの茶店が出店され、注目されたとある。明治維新によって武士階級の没落と同時に茶の湯も危機的な状況に陥るが、西洋からの注目によって茶の湯は復活する。その舞台は博覧会の会場であり、公園であった。博覧会や公園での茶の湯は、「それまで屋敷の奥向きに位置していた茶室が、大勢の人々が訪れる(p. 18)」民主的な日本の文化となる。

茶の湯空間の近代化の中で筆者が注目しているのは、茶の湯空間を併設した料理屋、茶寮の成立と、そこに利休堂が設けられている点である。「遊戯的とみられ衰退していた茶の湯に、千利休の精神性を象徴する施設を組

み込んだ(p. 55)」ことが、その後の茶の湯の発展に重要な意味を持っていたとしている。この内容は近代数寄屋建築の成立過程として、紅葉館(1881-1945年)と星岡茶寮(1884-1945年)を検証することで、詳述している。

2. 茶の湯の精神性の主張と建築論

第三章から第五章は文献研究である。建築家の論説だけでなく、同時代の茶室にまつわる他分野の文献をも考察対象としている。

第三章では明治期の文献から、美術教育家、鑑定家である今泉雄作の「茶室考(1889年)」、洋画家本多錦吉郎の『茶室構造法(1893年)』、武田五一『茶室建築(1897年)』『考古類纂』が取り上げられた。この中で本多に関する記述が大変興味深い。本多は西洋画法の研究者であり、『茶室構造法』では、数寄屋の室内図や外観を、透視図法を用いて描いた。『茶室構造法』は武田の論説³に影響を与えているという(p. 109)。

武田が帝国大学の卒業論文として『茶室建築』を提出した明治30年前後は、益田鈍翁等の数寄者がようやく現れた頃だ。武田の茶室論には、『南方録』後半部分からの引用が多いことに注目し(p. 103)、利休の精神性を参照することで、既存の枠組みに囚われない、新たな造形への展開を目論んだと著者は考える。しかしまた堀口捨己のとの比較において、「武田の茶室研究には進化論的観点が認められるし、また『南方録』のドグマに囚われている面が見られる(p. 112)」と述べている。武田と堀口の比較は、日本建築史の系譜転換の指摘とも連関するとされ、またそこに利休忌や近代数寄者の興隆といった世情も

背景として重視されている。

第四章は大正期の文献を採り上げ、興隆しつつあった近代数寄者による田舎の民家風茶室と、建築家達が理想とした茶室の精神性とのずれに注目している。近代数寄者達は鉄道網の発達によって郊外に屋敷を構えるようになり、田舎の民家を茶室にするのが流行となっていた。「近代数寄者の茶会記における田舎家の記述は、……益田孝（鈍翁）の田舎家が事例として見られ、彼が実践的主導者であったとみられる。（p.142）」数寄者達による田舎家の好みとは違う方法で（しかし影響を受けて）、大澤三之助や堀口捨己らは、住宅建築の新たな価値創造を考えた。

英国に始まる「田園都市」の定義は日本で変容される。堀口は「建築の非都市的なものについて（1927年）」の中で、「田園とは生活の本質的な欲求を自然のままに満たすことが出来る場所（p.147）」であるとし、そうした非都市的な傾向を持つ近代建築を海外の事例を借りて強調した。そして茶室を日本の非都市的な具体例として取り上げる。

第五章では昭和初期に、国際的な視点からの日本建築そして数寄屋造を再検する論考が充実すること、そこに蔵田周忠や瀧澤眞弓ら分離派建築会のメンバーが関わっていること、ブルーノ・タウトの来日と岸田日出刀の論考、堀口捨己の茶室論、吉田五十八の近代数寄屋のなどが取り上げられている。

しかしこの章で興味深いのは、堀口が茶室を建築要件によって決定されるものではなく、茶人の探求（ここでは有楽の如庵が例に挙げられている）によって、変形し、完成するものだと考えていたとする考察である（p.178）。この考察が、その後の近代数寄屋建築に関する論考にも反映されているように思う。

3. 茶道経国のモダニズム

第六章は、名古屋城内にあった猿面茶室にまつわる物語の生成、豊公三百年祭（1898年）を契機とする安土桃山のイメージの醸成などによって考察している。本書の中で異質な感じを受けるが、この章が加えられたのは、第七章の前に、日本史の中で海外進出を果たした安土桃山時代が一つの理想とされた時代背景を語る必要があったからだと思われる。

第七章では、建築や造園に才能を現した実業家、ジェントルマン・アーキテクトの草分け的人物である高谷宗範の数寄屋建築について明らかにしている。なお第三節は『デザイン理論』69号に投稿されている。

この章で興味深いのは、高谷と武田五一との関係についての考察である。芝川又右衛門の弁護士であった高谷は、渋川邸の建設を通して武田と交流があったと、著者は推測する。現在茶道の山荘流の創始者とされる高谷の代表作松殿山荘の茶室は、方円（四角と円）の意匠と色の多用が特徴である。その特異な造形は、「武田のルネサスのあるいはセセッション的意匠を、高谷は素人ながら解釈し取り入れた（252）」ものだという。

近代数寄屋建築を俯瞰する知識を得るために、本書は読みやすい。何よりも一見五月蠅く感じていた高谷宗範の茶室について、本書を通読してようやく得心出来た点、意匠学においても興味深い一冊と感じた。

註

- 1 齋藤康彦「近代数寄者のネットワークと存在形態——高橋箒庵「茶会記」を素材にして——」, 山梨大学教育人間科学部紀要9, 304-318, 2007, pp.304-318. MIHO MUSEUM「百の手すさび展2018年10月20日-12月2日。など」
- 2 <http://k-soho.hatenablog.com/entry/2018/02/08/000000>
- 3 ここで著者が参照しているのは、明治31年から34年にかけて『建築雑誌』に掲載された武田の卒業論文「茶室建築」である。